

KODAK
LICENSED PRODUCT



KODAK Gray Scale



唐
太
日
記

上

ル 7
3577
1



甲程のあまたも又さしてまじりて夷人の記述と陸奥の
 こととをいしてそのあつたが故に送道悔情の時より
 遠く甲の事とていふものありて他は行の事とて
 七事ありて甲の事とていふものありて西言下とてい
 へ

松浦竹四郎源弘

はまの事とていふものありて甲の事とていふものありて西言
 連島より後せらるる事とていふものありて西言
 シユヤ越とていふものありて甲の事とていふものありて西言
 りの事とていふものありて甲の事とていふものありて西言

出夫より奥トツリの候とていふものありて西言
 越まよりシラヌとていふものありて西言
 の事とていふものありて甲の事とていふものありて西言
 置れとていふものありて甲の事とていふものありて西言
 なりていふものありて甲の事とていふものありて西言
 余は海軍とていふものありて甲の事とていふものありて西言
 大伴とていふものありて甲の事とていふものありて西言
 伊勢とていふものありて甲の事とていふものありて西言
 松浦竹四郎源弘
 あらび丁この備内中とていふものありて西言

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

甲寅 唐太日記卷の上

多氣志郎 松浦弘 評注

嘉永甲寅六月余堀使君ヨリシクンは後ひ蝦夷地の西浦を巡視してソウヤフトの渡海場フシ所カカラ小風待マて同十二日順風カにて同所を出帆シ唐太島カラフトシマある志良努之シラヌシへ向てシ飄シふ

注志良努之へ唐太島の南第一岬西シてノト口の崎の少西岬あり後ろシ山有是シは靠て一小湾を覗シくソウヤと去るシと十八里とシ極高凡四十六度余也シラヌシシラウシシの

誤言也シラ、と岩のト云、ウシと云、と云、此地前、一ツ
の礁あるの故、は辨る、會所一棟、其外蔵、夷家七軒、甲寅
の頃迄、ハ山韃人等爰、來りて交易をなせしなり
風西、轉、たれ、區春許潭、向て颯、と、此夜ハ洋中、て夜
を明、翌

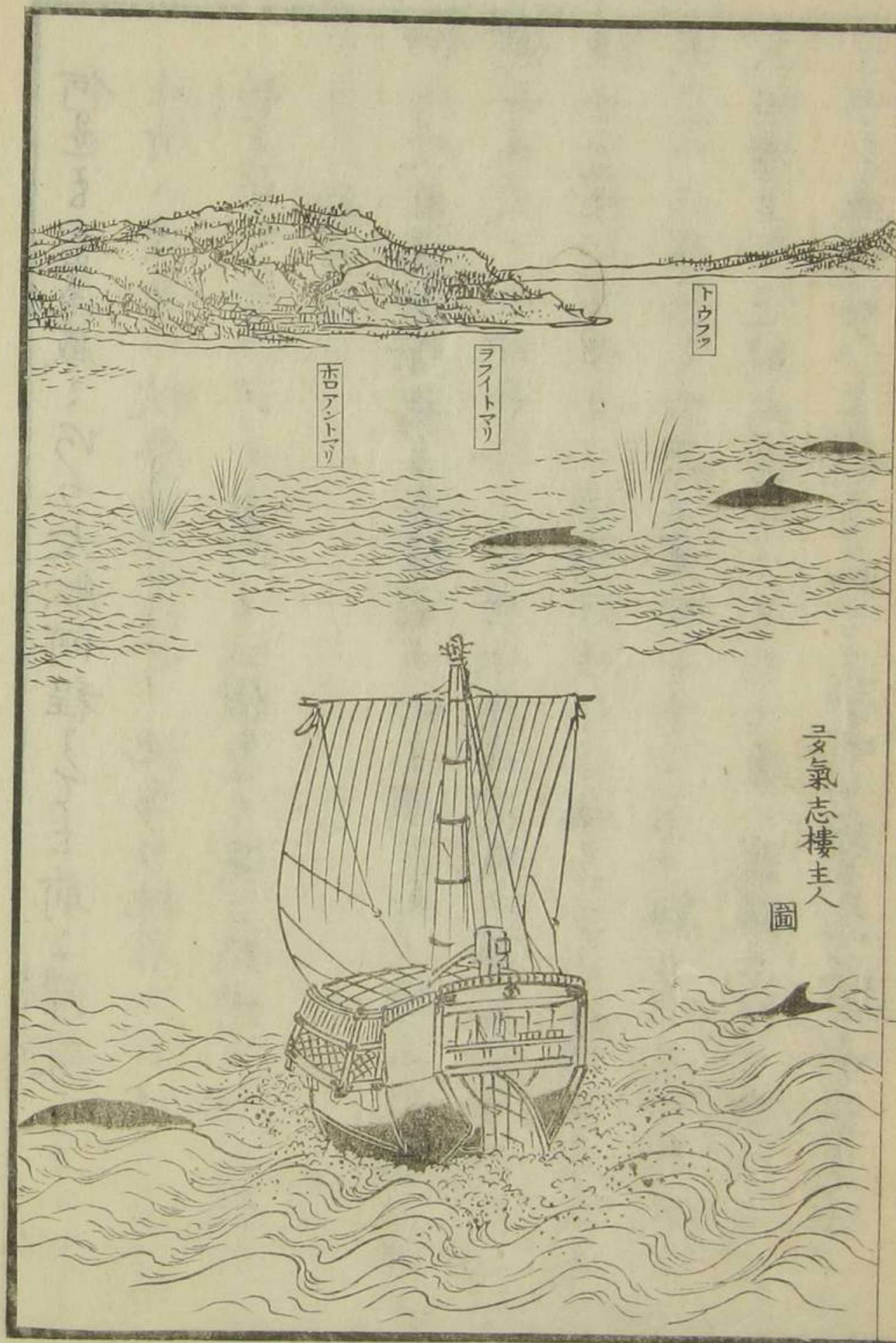
十三日未明より朝嵐、帆、と、遣、る、其湾中鯨魚潮を
噴、上、けて、其眺、め、い、と、辰時前同所、著、り

注、區春許潭、ハ當島第一の好港、西人爰、を指、して、アニワ港と
云、運上屋元、て、建物蔵、と、弁天社等、美、敷、と、其
北八丁、ハ、バコドマリ南三十余丁、ハ、ポロアンドマリ等

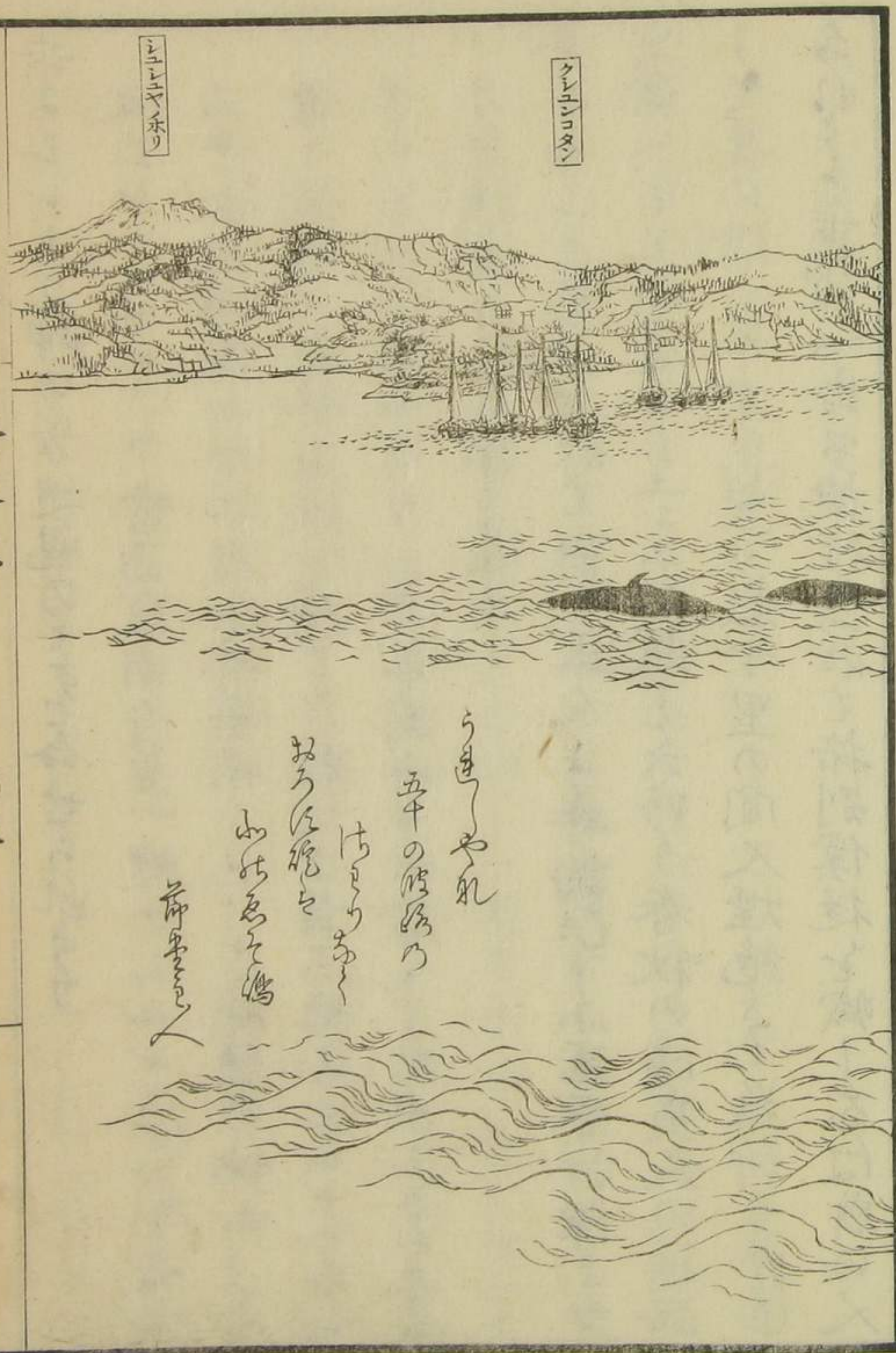
何處も番屋蔵、と、大船何程、と、前、ハ、滯、碇、と、宜、し
此所ハ癸丑の秋魯夷東住せ、地あり地名クニ、と、浪、無
静、と、云、コタン、と、所、と、云、儀、あり、實、ハ、好港、ハ、依、て、辨、け、し
とのなり

村垣使君其餘僚属も亦皆同日ふ上、所、たり、是より先き渡り
越、と、人、と、一、同、會、合、し、て、唐太東西巡視の事を謀、兼、て、ハ、堀
使君東浦村垣使君ハ西浦巡視の心組、あり、し、糧米、人、夫、と、
差支、ハ、の、事、の、と、出、來、て、東西手、分、り、難、々、れ、と、西使君、と、
ふ西浦より巡視、あり、し、と、なり、余ハ國、思、て、も、從、ひ、ま、り、
と、兼、而、思、ひ、と、加、く、差支、も、あ、る、ハ、水野氏、
正太也

唐書紀一 卷之十一



三才志樓主人 圖



うましやれ
 五年の修路の
 けり
 おうに能と
 山はるそ
 前

唐林記 卷之十一

共よシレトコ岬の方巡視のよきを命せられしなり

注シレトコサキ々當島東南の第一岬クシユンコタンを去て
三十余里極高四十六度余峻巖峨々として絶壁の地あり
是は激甚なる潮勢白浪を溯り難所と唱ふ地名シレトコをシ
ライトコの結語ありシラと前も云岩としてイトコと足る
こと云儀あり岩の果と云り

余るるあく思ひしれを能く土人よ尋詢ひしふ區春許潭より
東浦へ出る間道はシユンユヤ越と云り春秋の頃夷人の通路
として夏の際ハ草木生繁り数十里の間人煙絶々難所あり
あれとも東浦へ出る捷徑をれを格別僕從を減くは聊の人

夫して通路を多くしよるなり

注クシユンコタンより以北五里計りてシユンユヤと云る所有
其川をちよ入る少の陸を越日程六日あり東海岬ナイ
ブツよ出る是をシユンユヤ越と云あり然るふクシユンコタンと
出て東奥よ到る也當時本道と称する南の方叶をシヤニと
云るに到る是より上ある沼は越此沼より陸路り少くを
過て又沼あり東浦トシナイチヤへ出夫よりニヲチヨボカリ
ウエンコタンリコヌシヘツリヲブツサキ半シユマヲコタンリイヌ
シナイ余ヲワエコンテロレイニシユシユウシナイトシユマヤナ
ナエブツと廻るあり其里程一倍よ及ぶよりして夷人等步行

の時ハ此レユシユヤ越の方と通るあり

余竊喜ハ此道を踰テ国界ニ至んことを堀使君ニ請ヒ申せし
ニ使君その意をよみしめて人吏の煩ヲあきらむる處置もあは
如何ありしめて吾山越とて命せられし然る此日矢口清三郎
直養と余と相く此間道と踰テ国界ニ到らんことを村垣使君へ
建白したり其志暗合しつゝも亦奇と云へしは是ハ兩人同行
して山越あるべきのよしを松前の家来ニ談し支配人清水平
二郎へも談し兎角して人吏糧食の手當も出来られし此行の
志ハ遂ニ決しぬ

十九日今朝ハ朝陰クモり昼の頃より空晴風吹出せり朝四ツ時迄

る頃ハ區春許潭と號せり

余後一人名ハ直養も同一人名ハ熊打足輕水牧惣太松前家番人富

松豊吉嚮道者區春許潭の乙名イツホンクダゴエの小使サーブニ
アイノ等あり人足ハエ子アンベツ、エシマワセタボ、シラボク、ヨヲケ
ン、モンキワムツナ、ケトチン、エルシユトイ、カンコ、女夷ヨリエ
ケラサケンピリケス、ケタフヤ、ヤエランマ、シラエト、ヲコランヌ、シユ
コシユイケ、上下貳十四人あり此内糧米の減はる小随中より
追々歸せり

三拾余町よりて雲羅ウンラ此所より送りのこと袂を分てり此ハ
ハ番屋あり又去年より在留の魯西亜人の畑の試作りせり所

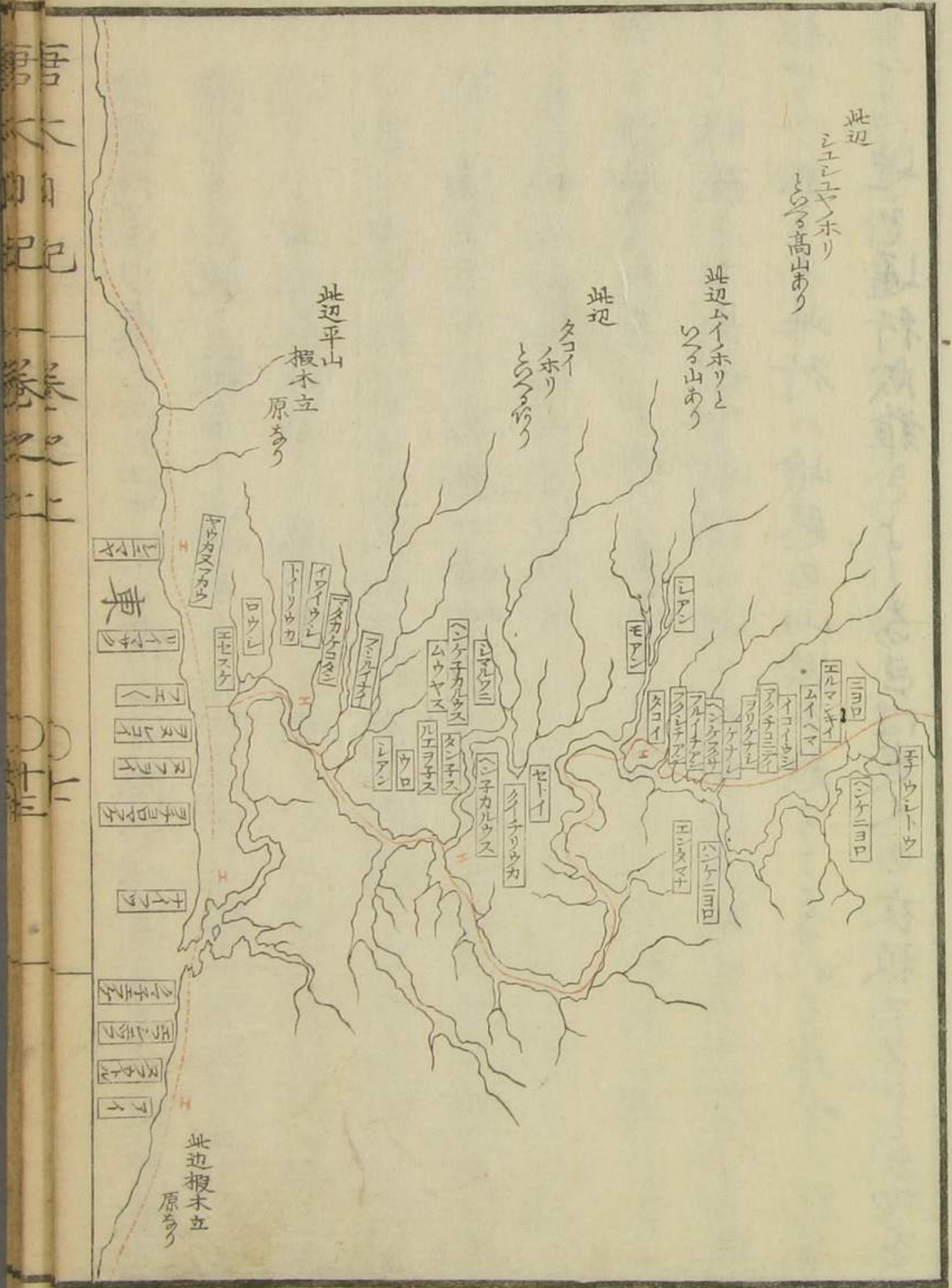
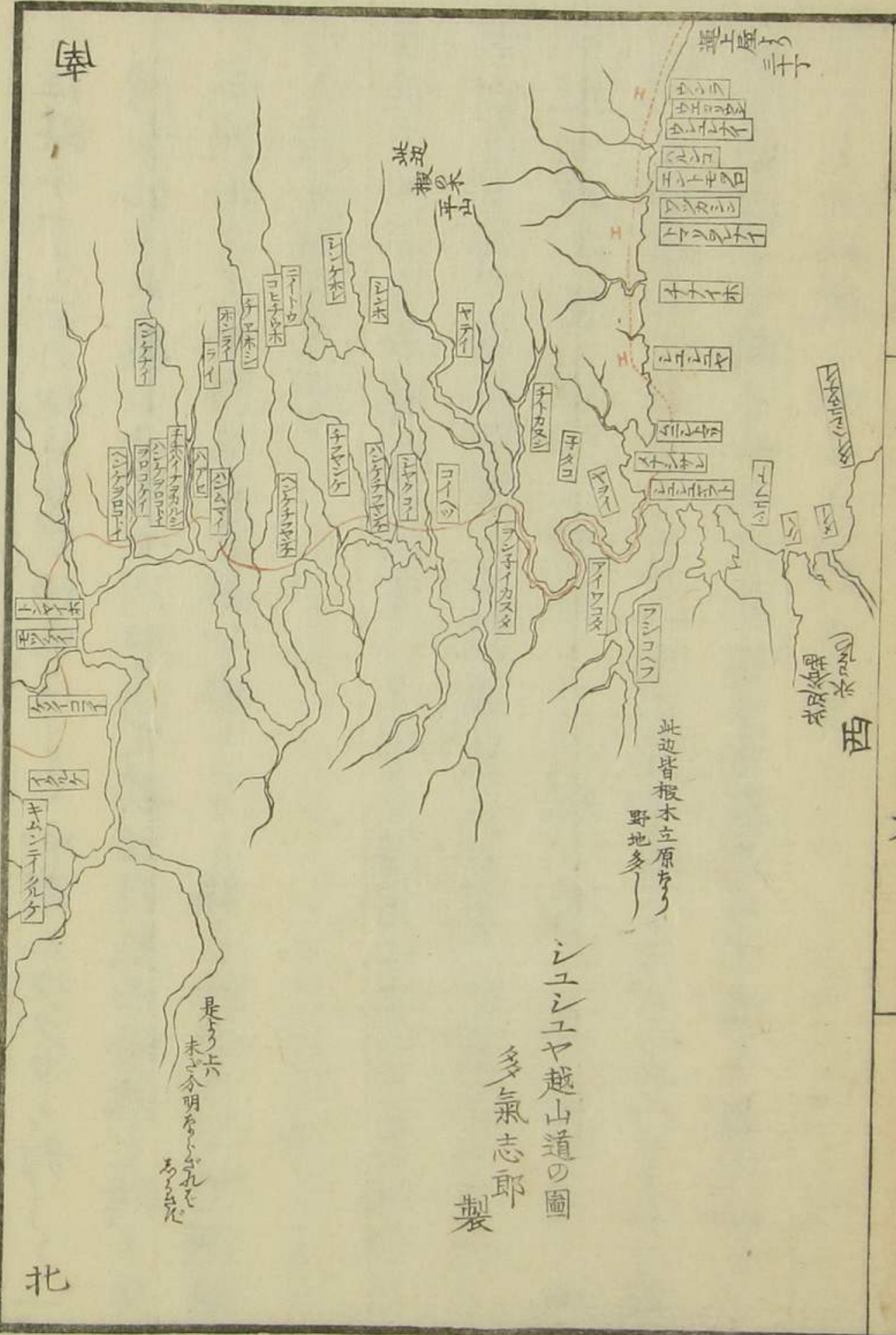
あり三畝歩程も有之蘿蔔^{ダイコン}喇叭^{ゴキウ}芋^{イモ}あと作りてあり傍は番小屋の跡あり瓦を製したる跡摸型^{カクダ}写取散りあり

注ウシラとくく地形後ろの方槃立山^{トク}とく其下は番屋一棟あり其邊り地味肥沃なる故は魯人も畑地を墾し又其地の土をりて瓦等を焼し跡有なり

夫よりウコカリウシ此所以前ハ夷家有り今ハあしウシエナイ稻荷の社夷家三軒と五町余りてエントモヲ口同武軒と五丁よりトマリランナイ同四軒と八丁余りてチナイボ此所は清水平三郎の持小屋あり是より明朝の潮を待てシユシユマ川へ乗入る船として未と日と晩とされとも一泊りたり

注此チナイボの地とく西向りて向濱ルウタカと對りて一灣をれし奥シユシユマ川口より其内越而海淺し所て一寄洲ありて干潟なる船を容りて依り此辺りより満潮を待つ容多あり

此所より平三郎持小屋向ふより寝食も安かりき此処の前より臺及歩斗の畑有て芦肥^{ダイコン}葛^{チサ}紅蘿蔔^{ニンジン}彭翁菜^{ゴボウ}等を作り芦肥は越年番人オ一の食料として水腫を病する奇薬のよし此後ろは炭焼の小屋あり是等皆平三郎始て仕りたるよし後僕等前濱りて鯿の四五寸斗あるを取来りて食は鯿夷語をカバレイと云此夜ハ心よくお臥せり



唐太原記

卷之十一

六

注當所より奥シユシユヤ辺は産する鯨の味美なること又其妻く
 産する他は穀をし冬日より此湾中一面は氷結り出の
 辺りの土人其氷上は大篝火を燃し穴を穿其火温の氣を集
 り来る魚を括搶して突取る羽の八龍湖にて氷を割て網を
 投し凍すりより其無一倍せりそのや又其肉味も龍湖より比
 する味を美るなりといふ

廿日朝曇りたきとも雨の氣色とも見えは今朝潮の満り
 して昨夜より夷船を前送し迎へたきは未明より支度して乗
 船せり然るに此行ハ嶮惡の山路を越るとるれを尋常の服装
 してハ此と通行成難きよりあきは夷人の衣服アツシと云物を

著し尾花帽子と云ものを打被りキナホスといふる脚半を附り
 固く一絶を得たり

欲執孤筇窮嶮奇風餐雨卧亦何辭樹皮短褐芭花帽也好
 人呼為島夷

注此間道の道形と云き処を凡の目的と山沚水脈等を取て
 丈よりとも高さ草の中を分りて谷地中ふると行とあり故
 終日下柙の露深されむ此装て行とあり其アツシと
 つら木皮ラキウとして織たものよりて是よりおの雷紋
 振のものを木綿りて纏繞し土人の常服尾花帽子といふ
 芭花の穂として作りしものあり多る羽の最上辺より出又

キナホスとのく奥羽にて蒲脚半とて寒地ハ本綿にてハ
雪の中凍合してあゆむ急く又草深き所を越るふ一日も不
保々故よ多く此蒲にて作りしを用ゆ是ハ南部領の沼宮内
辺より出共上品なるハ馬の尾と云く作り雪中越る山中ハ
ハ甚く遠しと云ふのなり

凡半里程乗出たる頃より空の氣色俄よかわり雨降り出たり
ツナイホ地名よりハ三丁余にてニユニエヤ地名夷家八軒あり三拾丁
余よりニユニエヤ川口あり入口水深甚丈五六尺余川口午の正
中より出れり

注ニユニエヤハ其地形後ろの方ハ鳳尾松の黒く繁茂せる

山續きニユニエヤノホリとのくく靠て前ハ少一の岬をとり其
辺り蒲柳原より水際より蘆荻多し其中ハ家居を営所と
此湾の第一奥の東岬より波浪少しと云くニユニエヤ柳の
夷言その多きに云く号せしや是より土人等歩行の節
ハ川口の手前字メナシサとのくく海を歩行しと云く
夫より山に入て字チタエと云くあり船にて行ふハ一里も
沖を乗りて此川をちへ棹さし入る此川ハ湾中第一の奥の
方より洪水の節押出せし土砂多く処々ハ附例と云く船
動を乗りしと云く難波と云く所あり

川は沿りて四五丁程の左の方椴林の内ハ鷺の雛の梢より落

たゞの驚て飛廻るを見附し番人豊吉船より飛下り續いて
 夷人共走り廻り終るを捕りたり是を西使君へ獻じしとて
 水野氏へ書と添て歸り船の便なきたり此辺鴨の子雀の如
 くあまの赤群く水上を行き歸りて路より川口より半道岸と
 して枝川へ入るより船を棄て上陸せり此所字子夕地名と云由
 木挽小屋あり雨多し強く降出しこれ此雪の小屋一泊せ
 と織と去りしとも無て山越の目を積りて食糧と携へこれ
 何程の峻急ありとも雨は障へらましく滞留ありやうして志を
 遂へるもあゝと鬼を角もして前路すまんと決定して
 歩を進めぬ

和人と白米夷人と玄米して九十日程の食糧を負戴しとの
 余の船とトニナイヤよりナエブツの方へ回と積りしと船
 一の分も引續りて出たりたるも風潮は障へられ
 めも東浦と回る内終り此船来りしと
 注此船廻りの事い前よりひるめく千ベシヤニより沼越ト
 ナイヤへ引出し東海岬をナエフツ搔送り行事あり
 此辺り両岬とも檜檜夷松の木の林あり女羅數丈の長さとの
 懸りて地は垂りたる内地は絶て見えて唐画の山水の如き
 あり一絶を賦して其木の皮を削りて置く

松掛女羅千尺長素絲翠蓋滿山香平生宸翫唯圖畫始識

唐太師評 卷之上 九

人間有此疆

此道樹枝交加して眼を遮り頭を障へ枯木朽根路を塞ぎ脚を
 着るを多く雨は滂々と降り困苦の甚かしの極なり幸うして二里
 ほどすすむと少くも高き所より弁岫をきしむる爰をメ、
 地と云小流ありて水清冷蚊の多きところ言語は絶り火を焚
 いた少くも疎なるあり夫より壺里半程して字アライ地名と云
 此所少くも高深林の中へ小屋掛したる小屋掛と云ふ氷の
 窟も少くも所を掘ると又小高き湿地ありと云ふと見立るありあ
 る此ハ腹痛の患あり湿地に臥すと耐ハ瘴氣を打てて病を得且
 虫の類多しして難養すあり扱小屋掛と云ふ六五本より立

本ハ枯木の丸をわきし是して屋根柱と云ふ其上を椽の木
 の皮より葺きあり夷人とも事馴たはハ携ふる銀してその皮を
 剥きして手早きことの水あり

注此山道中誰うても通好の時小屋を架ともや必も椽の立
 木の皮を上下長四尺斗に銀目を入置て剥き是して葺く椽
 三四人の宿ともあり小屋家根ともあり其皮丸或十枚二十枚
 も用也其皮き奉の木より必も一枚ありて剥きゆと云所の剥
 取し木ハ枯朽るとのあり信て其耐も小屋掛したる云所の
 跡を余通行の時節見ると凡一ヶ所毎も百本余ありと云語
 たり是等のありとも此地樹木の多きことを知るべし

小屋の前より枯木を集めて終夜火を焚き急率に掛る小屋
これに雨降出ると漏りて堪るくも何とぞ油紙あり
引掛て虎角して夜をぬぬ

廿一日昨夜より雨降り續きたり此の時以てアライ地名を出て半
丁程にてアライ川より此川水清冷なり爰にて嗽すぬ夫より
山道前日の如き椴樹美松の中を九十里程にてコイ地名と云地
より深草の中より小屋掛あり是より入て朝飯の極り飯を食す
注此地一ツの沼あり其沼周りに寺あり是より入るをコイヘツ
と云水清冷なりよりの出入多通行の節多此所にて宿
すわり余も通行の時も此寺より小屋ありよるれとも爰にて

来ることを得たりと云つて露宿しぬニユニヤ
と云く是より雪路ありは早著ると云れとも夏道ハ中々
著し難し

番又腐松樹皮を剥て此所を始と通初せしを記し是より
あつた余乃其本を漫書したり

草露鞭來山露新
手排茅塞分荆
榛風流宦吏過
斯地開關
以來唯二人

此辺より左右草生茂り虎杖イタドリに似て夷言ハツハシと云まて款冬
夷言をコロクニと云ふ一圍余あるの路を塞き先イタドリを又ハ見ると
能つて其上泥濘して深き所ハ膝を没せり里河よりして小川を

渡り深林を分行くは向より来るものあり東浦ヲタサンといふ
所よりウクシユンコタン勤番の松前家士一同億より書を書状の
飛脚より此夷人の話より先立の間官等へ積贈る米船をヲタサン
洋して傾覆し其米を失ひたり故より米を積贈る飛脚より此米も
我々糧に關係するものあり各是よりして心を傷めたり爰より
飛脚より別道晝食して歩を前あたると路は猶も悪くさぬの
草叢を以て水葵の如くして葉の大ききあるものあり積舌と云
款冬といふ多くして以て大なる

款冬如竹鬱叢生葉々相重翠影清山路不妨多雨露一莖
代傘蔽頭行



注世間歎冬の大ありとのと秋田歎冬と号て好事の人其業を
擲よ大き藤紙半一又風發家尋く是を筆に此は此地の物
ハ是は倍して若藤紙擲つ時ハ全紙は満へく是とのとの
比せ馬業合羽とも云ふまじ

晝休せし所より武里余りてライ地と云る茂林は小懸と此辺立

木の中程を尻して扱きたるやうなる跡あり依て是を土人

向つて懸熊の雪中途は迷ひるる事ありと又是より武里余

行てハセ地と云所は夷人とも通称の爲は掛置る小屋

止宿と

注此所とハセと誌されし實ハ此処ハアセクシといふ地

ありハセと此所より初て先生嗽ききし川をハンケナイと
いふ其川の向ありし越而此辺の土人往來とも此所の
川の此方より彼方より北宿する事ありといふ余も此川の
向より宿をきり

此小屋ハ左右は雨覆あり中より火を焚き今有直養余は
云糧食給せ及志を遂ぐる次日を併せて進くとすれども
女子の人妻も擲りたるは意を任せて依り某處に進入て糧
食の手當をさしし行李ハ跡より搬運せしを余も托せ
とわたり其意を任せて余ハ一日路も後進してはくまんと議あり
評余未だ直養を邂逅せし物なり此所は讀みりて其意を

感し拍手して一笑と此深叢中数日の難程猛獣の跡歴と
 志く惚へき地あり小直養強て前とをり其意敢て糧食
 の為のこゝろありし此辺り是は沈潭に没し面部は如何
 やうな装とも蛇蟻の為責くつる同行の為より取ら
 て踏むの取らふ時如何とあり難し余もクシニコタ
 武人と同行のよう隊長より言聞されしをあるの遅足と察し
 前折を於一日あり只土人のをもと運んで出立したるは按よ遠
 りと其友士の遅足とて種々の奇話もあり他他日土人
 共より聞ゆつるおのり

此夜の夷人共の掛る小屋をれは床と云ふものもなく故殊り

多々として紙帳の破きより入瘴氣肌を侵して眠るはきき無きや
 き

廿二日朝の雨は曇り昼迄より晴なり直養ハ朝疾く起き従僕
 走入番人富松は郷道者イッポク其外人夫五人を引連糧
 米其外必用のものを持せて余より先を發せり余ハ少く後進
 て出たり山道廿町余も過てハセハツ水清く浅く傍に此
 川より嗽たり

注先生此川ハセは有よよりてハセハツと云ふされり
 此山中ハセハツと云ふものなり出入此川を指しと云ふベ
 ケナイと云ふありベンケと云ふと云ふ事ナク是則此

此所ハ上の沢と云儀々余ハ此川の上にて宿しぬ
 又拾四五丁とて同一川の上にもあるサアブニアイノ余を脊負
 て渡せり夫より一里計りよて字イナヲカルと云る処より
 出る此所木幣多く多て山霊をまつり

注此所亦名チハホイナヲカルウシと云ある一柳の大木有
 其傍は往來の出入削花^{エナラ}と建て拜する一行とあり其謂ハ
 昔此島は鍋の釜なりし以タコイは住る焼く土を以て始て
 鍋を作り東浦の土人ハ其製を教へ夫よりして南濱より西
 浦の土人も教へんと鍋と脊負此所より越えりて風を過
 て破りたりとまより意の違せざるを患ひて此処にて宿し

係り終り死せしと云り其跡を今亦も余り置き此辺りの土
 人往來の時として削花^{エナラ}とまよりて数日の途中の食糧を獲き
 此越えんとを祈り誓ふとのや也此其土鍋を此島にて用ひ
 し事や昔の赤本話一の物と思ひ居りし今度^丁は
 産堀君は西浦の初よりユンナイとて右に圍せし也と鍋
 をき投出中よりほり出せしとて同所の土人献せし中より
 持歸りありしと見え侍り余も始て土鍋を用ひし昔徳を
 を信しぬ

又去重余よりユニユヤの川より出る此処をヲロコトイと云
 此辺りぬりの道ハサもなれとも草生を以て深く歎きいふ

徑七寸余
深サ三寸五六分

手作リ厚サ

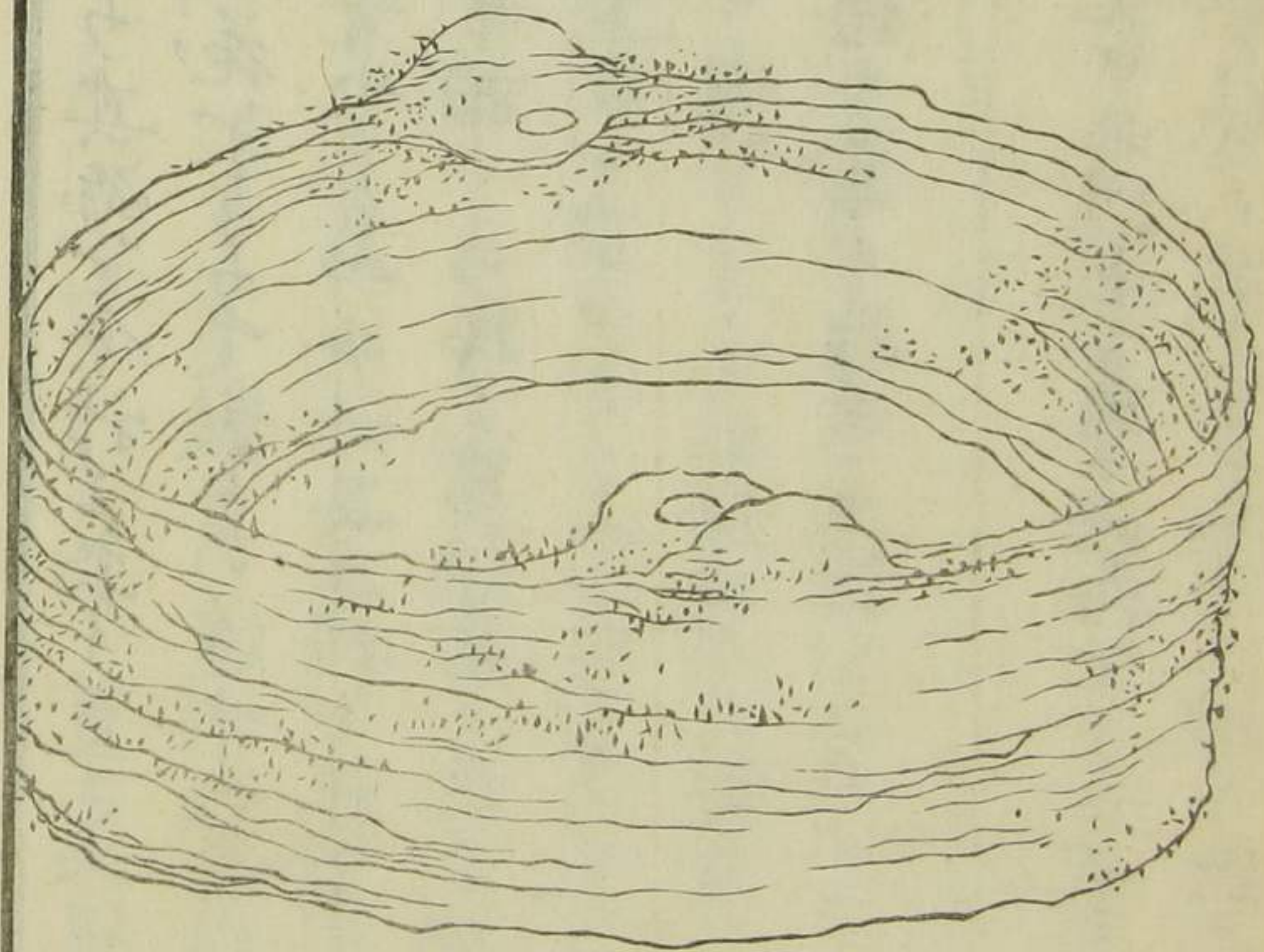
九三四分ヨリ

五分モ有款ナリ

土至テアラク

砂マサリナリ

尋氣志郎
縮写



太くもぐの故の多きもの言格は條よりまより同一相する深藪
中を分てき里半程迄てまここユユヤ川の端は出る

注此地ハ字ベンケヲロコトイと云あるし始めはわし川端ら
ハンケヲロコトイと云下のヲロコトイと云儀あり此辺の款
冬原あるう余爰は肉菰容と數十莖均しくウクニユンコタン
の小使ツクニウと云ふ頗物を毎へ居る者あるもの故は是を
こより何と云ふものを出し次物とて百連するロレイの出入ア
カラカイ人各うは是ハ夷言エバーと云て東海岸の玉人ハ
撲傷折傷金創等ハ是を搗碎きて附るは其切驗著と
依て考ふる是ハ南嶺より西より東海岬より多きと云ふ也

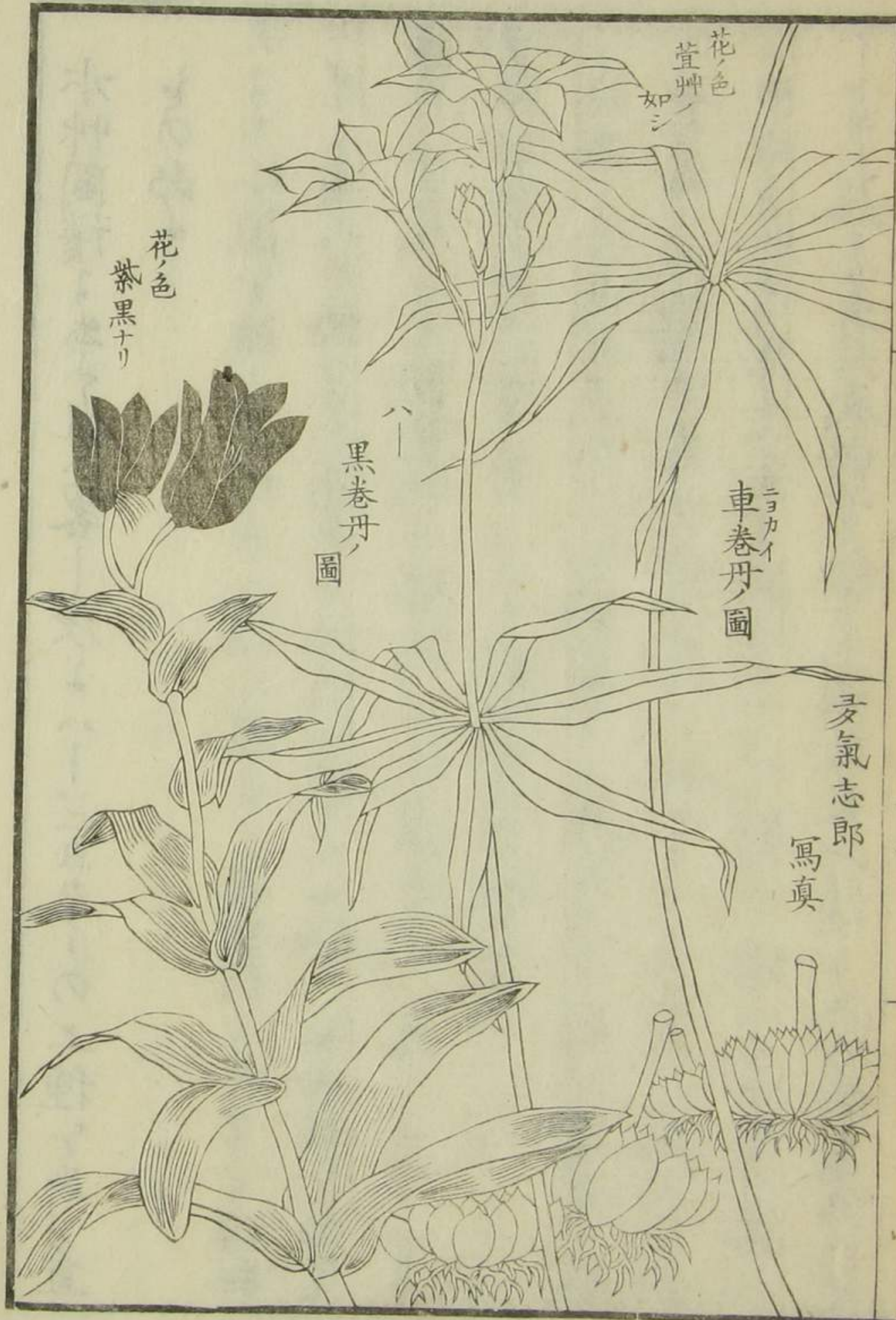
その形像日光山誌まゝ本村圖譜より出され畧す
 土人等夫婦此所は小屋を作り居る者スグロクと云女子を
 木トヒンと云其傍は小川あり字モツケイと云下其出入等ハ
 何の爲に來り住むる也聞は轉の漢と云又食料は肉也アンラ
 コロとの名村の根をほりて來り居る者あり依て石連する出
 人等は直に煮て振舞ふ

注アンランコロは東西蝦夷地にての名なりて此地をハ一と
 云別黒卷丹のトありは餘ニヨカイと云そのあり是車卷丹
 のトありトマと云て延胡索の根を食用と云延胡索
 ハ藥名なりて通名はヒツチリと云漢名を滴金卵と云は圖

本村圖譜より出され畧す次はハ一ニヨカイの二種と出され
 どのあり

夫より小流と論より何處も橋あり半里程よりしては深林
 の中は夷人の掛る小屋あり此所をエクルケ^地と云此林と出
 廣き草ありあり蝦夷松の緑深くして草の丈は高きす白き
 總揚枝^{ノキ}の如き草多きと云景を宜き地あり

注按るは是草はあはは菌草^{キノコ}の一種あり雜木繁茂枝
 葉落ては腐き喬木倒きてハ朽ちるの地也は梅雨の次
 め此ものを生じて余も此地よりして數十種のものを見る
 イナウシ^地と云此原野を留り過て又山道に入り或里余して



深林の中小高き所々小松掛して夜を明やう令宵ハ直養も石
ら及いとわひいりたれ也

辛苦嘗來雨又風寧堪獨臥亂山中別君最是傷心處今夜
同林唯草蟲

又

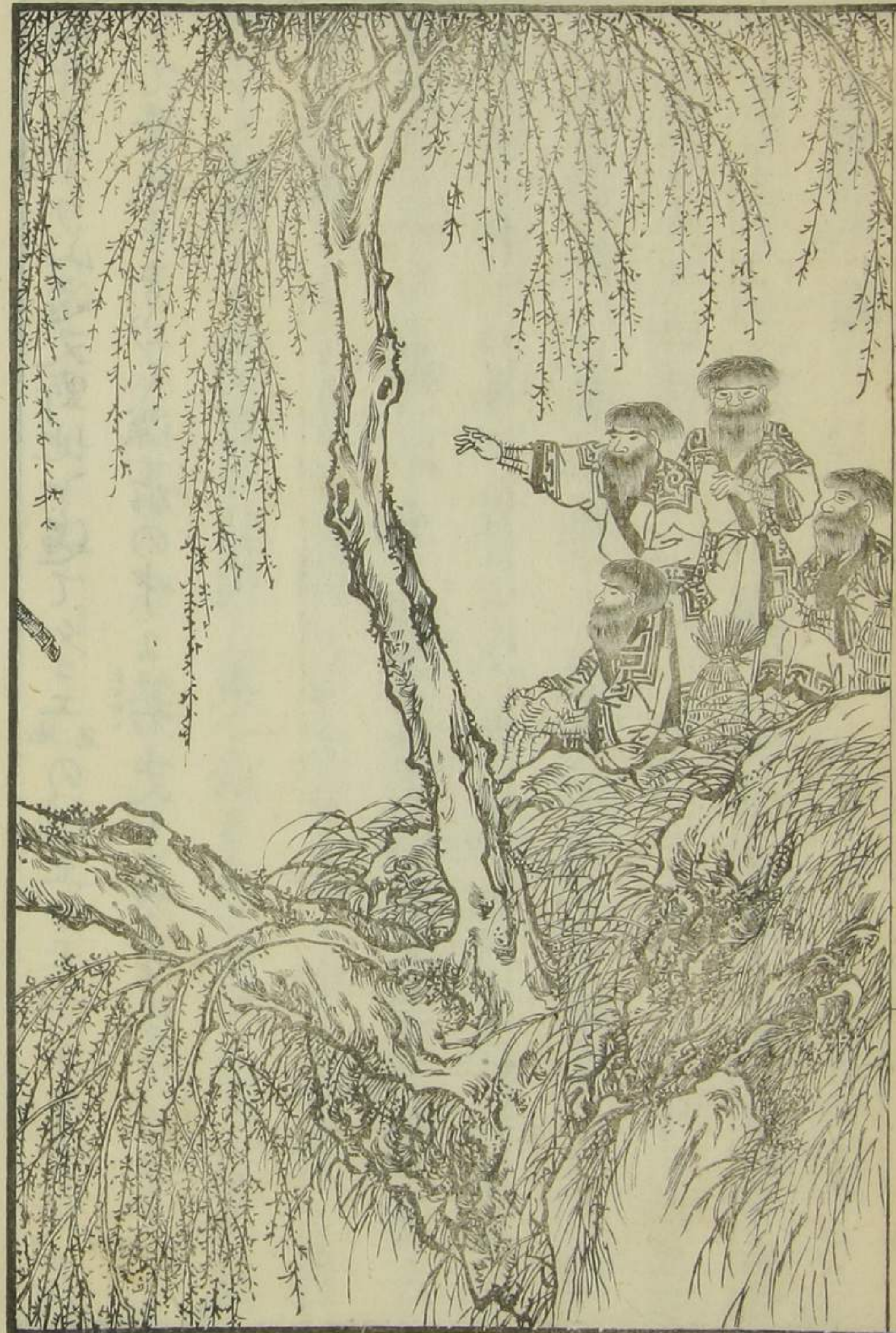
斜架危檐了木支潺湲先辨與茶宜泥鞋探嶮穿山骨秃筆
題詩白樹皮雲濕半牀無客伴草埋荒徑有熊窺怪禽夜叫
長松上獨寂幽奇就睡遲

注子ウシとエナヲウシの結構あり此地東西の境目よりて今
水の地あり依て往來の出人東より味台とのハ割花を伴つ

東の方の山靈は嘔えし西よりなる者西の神は嘔えしと連
中の安を祈るあり依て多く此所より立ち去り故に號するウニと
多しといふ儀なり

廿三日朝曇り五時小屋を出て山林を暫く行ニヨロマトウ地名と
なる沼の端より出て夫より廣き野地より此地萱草カシラ以て乱れ生る
は藜藜アヤメ多く咲き交りたる地にて四方お開け少くは霧氣を散り
たりけきとも坂の多きより糠と振蕪のぬりうりさるるに
那へ来ると又落虎杖多く生れりたる中を分け行り前行の
人ハサハも見えぬあり其路の大き根の所にてハサハ七ハ寸も
廻るへ一丈半余あり子モイ地名と云ふ処へ出る此所川あり巾狀

間斗夫より山道又野地を過てタコエ地名の川上カモイチウといふ所
にて登級とまると深草の中は繁クサ交り多きを分てケナシ地名
到着又此所より小川あり其傍は夷小屋を斬られとも入るり又
同じ処四五丁より中四五間の川は大きな柳の樹の傍より
橋とるる処あり枝ハ半天もぬき出て深翠叢とて一むき
是を越て野地山林とてホクイチヤン地名といふ所にて休む
禅頼光峯入の畫巻物より彼大江山より童子岩岩の
まへに大なる溪河を枯木を倒して越るる溪あり此生
おろろろと其心拍して城へあひあんとて爰より
て竊笑る



夫より拾丁余よりフルシチヤン^{地名} 漢小屋式軒あり又拾四五丁
 行てトノシチヤン^{地名} 此辺は夷家甚多ありて七歳斗と四葉斗の
 小兒或人並居をり此夷家ハ我より来る人足ホニキツ^{人名} 夫妻
 の家あり妻をシユコシイケ^{人名} といひ家あり老人或人ありと云此
 小兒をホニキツ^{人名} といふありと思ひるホニキツ^{人名} といふ此子と云ふは後し
 置クシユコタン^{地名} へ夫婦して移り行て居るは此邊の人まは
 常々れらるあり今日ハ己の家より去るものハよく止宿して
 先づと違りりき此処よりやうく同し道と約と元二千丁余より
 て嚮導サアブニアイノ^{人名} の家より着せりサアブニハ當時家内九
 人等一のよりあるは春届斗りよりあるは次寄合世帯のより

小屋ハ四間ハ二間半もり多し煙をこら切てあり其一段高き
 所よりキナ^名 とて余の坐を設けり余サアブニハ寶物と
 見せりと乞ふれ一本^{ハニユ} 様子をて櫛より延かすの中ハ
 赤錆の太刀の身と其鞘とあり然るは刀此錆くは
 とも鞘より入り又その外は銀箔と貼るは昔蒲刀の身柄の板
 あり作りしを見せり余ピリカくと賞しけきハサアブニも其
 賞せりと云何思ひや笑り次はまてカマスの内より女の古
 着と出りて見せり是ハ彼晴れ若の生^{ナマカ} 壁をよそ襦袢扱
 の後附より是を折疊せりよりのちかき唯かき次の内より押入
 たまは揉み雛と云ふと啼き今宵ハ山中と違ひ安心して

うき御ね

注此処平地にて東の方のタユイノホリより落る河と南ニヨ
 ロマイの方へ落る川と合して是より五里斗と下りナイ
 ブツ川よて落合々あり人家九軒ありてサアブニと此所
 の小使役やその故く家も相應は大きくて余も此處ありて
 止宿せしありし時耐寶を乞へばはやそり一本梯子よて
 梯の上へ乗り庭かまきとせぬりし中より古着を授けり
 大きき刀の身まき本と鞘とを出しん母をけりけりしは身
 志て子母植ま巴の紋と之程彫きりし其鞘ハ出人より
 の細玉よりありや擇りて処々巻玉極雅味あり



叢教をくまきとのなり扱を傍の柱をんくく文字扱のとの
有り教よ是を問うく矢口ニシハのカンヒと答くく見くく
如何もも手垢くく思くあり終に讀むことをゆきくくも
遺恨ありりる

按るく余是事は何処もせよ落書するく又どのりて生来よ
麻附あると徒く事と忘むの情高く依て余は落書つ云
く及も及くまふは麻附くくありく此度の行処く山
中くく絨目等とんて夫を目的く心おまきくありしり有
く外ハ我も体く所ハ必は何成く志くく置くまくとれ
くしゆり依てくく人を得く其入に任よ當れハ歐州を

あはくく一箇くく処へ用ひきた何ハ英雄豪傑後よりて
も驚馬くおくく一落書絨目も堂社の柱礎まきの白壁扱
ハと用あるくくくく備くくか山申くく見る村ら
一題の直も余金とてんあふ

廿四日晴くくサーブニの宅を出て前の川を渉りてやうこ
深草の内へ入くく秋冬との余のまの是きてよりも生後り
て悪きくく人かくくあートウシトウ^地の服と通り山よとり野
地とよて小川よあくくウロウと云所あり爰して島雀の鳥
よ追つ追つて捕へく深草の内へ教ちやくく夫より村の
中を求めてシアンチヤ^地と云く此所夷家二軒エフン^人と

云々の家子休む此家子直養と休む一也云々此小家のお
 二搬英船を備へたり依て是より乗る川中或拾間余も有
 魚一是タコエの川下あり兩岸垂柳して屈曲一拾丁余
 してオン子ナイ^{地名}と云川は落合是より幅廣くありあり
 注此処余を通り一より一異り余らタコイより山道を
 里半計りありへん子カルウ^{地名}と云るの由ありて三里余も
 下り此ニアンチヤのエフレハの家にて休む夫より廿丁余も
 ちくナエブツへ下るあり此ナイフツ川ハ西北より落来りて
 此川の本川と云是より上より人家或子村もある一凡
 是より河中七八拾間あり及ひて是を除きより四里より五里

位より及ぶ當島トツリ以南の第一の巨川にて水約も
 多し

キ、ニウ^{地名}シ アフコタン^{地名} ビラボ^{地名} ありと過て二里程してホロスウ
 川岸より忘く船より此所より女夷を人停居て声と掛りり搬
 夷船或艘来りて余より舟中のサーブ^{人名}と物語りてやがて
 乗来り船と交りて乗替りり此辺より雨頻り降出し
 寒し堪らざる其形状と家ありてや女夷薪の燧さしを持
 来り火鉢振の物ありこれをきり程も有る板より首より
 手と懐めをり程あり薪の足たきても板より火燃へて暖あり
 此辺左右の氷より水約あり首と出りて船を窺ふより川

岸の鬼の居るをりサーブニは関は是をヲリケエ鬼の
 のり夫より里ありてナエブツの岸より青竹中を夷言
 行き夷船の着と通辞の豊吉と跡船して後進より船
 糧米の心よかよ余柳の足へり夷船の門く運上屋
 チツアマ、アンナと問へ夷人等首をとりてイシヤムくと
船の爰より大の望と先ひ如何いせんと案へ船ひきり雨の
 ちり強く寒きん堪へ道は煙は禁火とて身を暖め
 濡る衣敷を乾しあはる間く船も着て夷船も通し
 直養の書くる書状と取あはる漸く事情もあつたり先々
 直養の心構へは賜りて武苞の来は是之の間宮を持行り

余等との為よクニユンコタンよりおろき米の来と着せと先之の
 為よ跡より賜り米船ハ昨日此地を過てオタサレ地と云所より
 行過るよりあはる此船と引留て糧食の事あはるはへし
 とて直養とオタサ地とて走り行へりなりか
 故に我等も同行の糧食ハ何と云と十方よ暮るなり
 評先生十方よ暮るれはむ目眩は是等のぬ
 今由米ハ漸くハ絆あり云米も亦幾ありしをれを豊吉又覺
 ちて是より武里斗りも南あるニユニウシナイと云所より云米
 事年入加満と取寄りなり是めて皆力とて此夜より云米
 と食とてと議して齋たが焼耐と云物かへり喫して

打即より其家の至入の名とワーチヤアイノと云ふ

注此処ハ東海岸にて萬里の波濤目々濤々ものあく此河ハ
壯地第一の大流沢目數十里開くも源ルルウタカノホリより
来ル其川口の南畔に家居とナイブツと沢の入口との下儀
ら熱帯水心塩氣と會くと惡し一武拾所もより壯岸一
の沼あり元四り武里もあり其辺り皆根木立系海岸も
五鬚松の長き木より武土位のもの林とありたう秋より末
此辺り鶴居に林さ油くの水多あり一は鴨居の築り
きさび家の内より對坐し物格とせらるも教を妨め
て間より難きほどありとや

甲 唐太日記卷の上

唐大
言
卷
北

北

飯田
石海

